



Title	色彩語whiteを含む強意直喻表現の分析：white as snow/ a sheet/ marble の比較
Author(s)	竹森, ありさ
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2022, 2021, p. 43-53
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/88422
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

色彩語 white を含む強意直喻表現の分析 —white as snow/ a sheet/ marble の比較—

竹森ありさ

1. はじめに

本研究は white を含む強意直喻表現について分析を行う。

強意直喻表現(intensifying simile) は、基本的に [(as) adj. as N] という形式をもっており、形容詞が示す性質の程度を高める proverbial な表現である。最初の as はしばしば省略されることがある。(1)に強意直喻表現の例を示す。

- (1) a. good as gold
- b. free as a bird
- c. cool as a cucumber
- d. white as snow

このうち(1d)のような形容詞に色彩語の white を含むものを本稿で扱う。as...as の直喻と異なり、色彩語メタファーには、“white lie”、“feel blue”など、嘘や感情といった、本来物理的色彩をもたないものに色を当てはめた表現が見られる。しかし、これらに比べて強意直喻表現は、“Her skin is as white as snow.” のように、視覚的なつながりがある場合が多い。

強意直喻表現の特徴の一つとして、[(as) adj. as N] の名詞部分を様々に入れ換え可能な点がある。white の場合は、white as snow の他 white as a sheet, white as ghost, white as marble, white as milk, white as lily などが挙げられる。これらは基本的には全て「真っ白」の意味であるが、名詞によって強意直喻表現の使用傾向—伝えられるニュアンス、使用の文脈と直喻が修飾する語彙、いつから英語に出現したか、など—は異なる。本稿では white as snow, white as a sheet, white as marble の 3 つを取り上げ、共通点・相違点・意味変化を観察し、これらの使用特徴が生じる原因を探る。意味変化の観察を行うのは、強意直喻表現が古くから使われ慣用化したものがあるという点を踏まえ、分析の上で歴史的視点を取り入れることが必要だと考えるためである。

以下、2 節で先行研究を紹介し、3 節で研究方法を説明する。4 節で強意直喻表現のデータを示し、使用傾向を指摘した上で、5 節でその考察を行う。6 節で結論と今後の課題を述べる。

2. 先行研究

「強意直喻表現」は Svartengren(1918)での[(as) adj. as N] の形式をもつ直喻の呼称の訳である。この形式の直喻には ‘intensifying similes’ の他様々な呼び方—'stock similes' (Norrick1986)、‘as-similes’ (Moon2008)など—がある。また、本稿では、“Her skin is as white as snow.” の “her skin” にあたる最初の名詞(句)を N1、adj. as に続く二つ目の名詞(句) “snow”を N2 と呼ぶ。

強意直喻表現の特徴の一つとして、Svartengren(1918)は、文学作品によく出てくるが、新聞や論文には見られないことを指摘している(ibid.462)。Moon(2008)も、コーパス Bank of English から強意直喻を抽出した結果、小説には as-similes と強い結びつきがあると述べている(ibid.23)。

強意直喻表現の N2 に関して、Norrick (1986)は、N2 はその言語話者の間でよく認識されているものであり、何度も使用される N2 は、あるカテゴリー内のプロトタイプと判断できる根拠を示してくれるので、強意直喻表現は認識のパターンを考察するために重要な手掛かりになると主張している。また、一つの形容詞に異なる N2 が連なる場合、例えば “Black as night, Black as soot, Black as the devil”などは、それぞれの含意(connotation) があることを指摘している(ibid. 42)。Moon(2008)はこの主張に対し、名詞によって “humour, affective meaning, and other features of interpersonal meaning”などを伝えられると付け加えている(ibid. 9)。加えて、Moon(2008) は N2 が異なるのは、形容詞が多義的で意味が異なる場合があるからだと述べ、具体例を挙げ、“red as blood relates to colour, red as a beetroot typically indicates embarrassment or anger”と説明している(ibid.8)。しかし、形容詞の意味に合わせて特定の N2 が選択される根拠には触れていない。red as blood の直喻は red の色相について強調する表現として使用されると言うが、blood にも直喻の使用者が意図する含意があるのではないか。

N2 の使い分けとその文脈に関して言及している研究は、吉村(1997)である。1400 年ごろの作品 *Emaré* の中で使用されている white as N2 の強意直喻表現が、主人公エマレの生活環境に合わせ、”whyte as whales bone, whyte as llyye-flowre, whyte as fome, whyte as flour” と名詞が変化すると述べている(*ibid.* 552-3)。これらの強意直喻表現について、“llyye-flowre”に関しては潔白と純粋を意味していると説明されているが(*ibid.* 553)、“whales bone”, “fome”, “flour”の言葉が何を象徴しているかを示す必要があるだろう。

以上の先行研究は、adj.と N2 のつながりに重点が置かれてきたものが多い。強意直喻表現の使用傾向と、N2 で表されるものの認識について分析するためには、N1 も合わせて見る必要があると言える。また、N2 が伝達する含意についても、その名詞が文化的にどう捉えられているかに注意した上での考察が必要である。これらの問題点を踏まえ、次節で研究方法を説明する。

3. 研究方法

本節では、*white as snow, white as a sheet, white as marble* の使用傾向の比較方法及びこの 3 つを分析する理由を述べる。

3.1 分析方法

強意直喻に慣用表現があるという性質上、歴史的な視点が分析に必要という点を踏まえ、時代を遡って強意直喻を分析するためにイギリス英語を対象とする。用例を採取したコーパス及びデータベースは表 1 の通りである。強意直喻表現は文学作品に使用される傾向が強い(Svartengren 1918, Moon 2008)ため、小説を扱った HUM19UK や BNC の書き言葉に含まれる Fiction 部分から用例を抽出した。18 世紀以前の用例は主に、英国・英語圏刊行物を集めた EEBO、ECCO からのものである。また、補助的に Google Books¹を使用した。

表 1 本研究使用のコーパス・データベース

コーパス・データベース名	時代	ジャンル	総語数
British National Corpus (BNC) ²	1980 年代～1990 年代	Spoken/Written	S:約 1000 万 W:約 9000 万 FIC:約 1600 万
The Huddersfield, Utrecht, Middelburg corpus of 19th century British fiction (HUM19UK)	1800 年代～1890 年代	小説のみ	約 1300 万
Eighteenth Century Collections Online (ECCO)	1700 年代～1790 年代	Written	約 207,000 卷 ³
Early English Books Online (EEBO) ⁴	1470 年代～1690 年代	Written	約 7 億語 約 25,000 卷

データベースとコーパスから用例を抽出し、それぞれ 3 つの直喻の N1 と文脈(どのような状況で使用されているか)を明らかにし、使用状況の差を比較した上で N2 の認識について考察する。また、直喻のニュアンスや N1 には現代と比べて変化が起こっているのか、起こっているならばどのように変遷したかを確かめる。

¹ Google Books の用例は British English に限定して検索した。Google Books での書誌情報はデータをスキャンした図書館の所在地に基づいているので、著者の出身地を確認した上で、イギリス英語の書籍と判断している。

² 発表年が 1980 年代～1990 年代ではないデータ(例：*Dickens Oliver Twist* など)は除いた。

³ 語数に関しての説明が公式サイト(<https://www.gale.com/jp/c/eighteenth-century-collections-online>)にないため、収録巻数を記載した。

⁴ EEBO には異綴が含まれるため、white は hewe, swite, wite, whtc, whie, whyght, whyte, quhyte, whit, quhite を検索している。また、EEBO と ECCO で複数の版が収録されているために内容が重複したものは計上していない。

これらのデータを示した上で、使用の差異が生じる原因、現代の使用傾向に至った原因を考察する。

3.2 *white as snow/ a sheet/ marble* の調査理由

本節では、*white as snow/ a sheet/ marble* を調査する理由を述べる。BNC 全体と HUM19UK で *white* を含む強意直喻表現を抽出すると、最も頻度が高い N2 は *white as snow* と *white as a sheet* である。この二つに関しては近現代の用例が得やすいと考え、分析対象とした。

white as marble については、頻度が高くはないが、顔や体の青白さを示す用法があり、これは *white as a sheet* のもつ意味と類似しているため比較がしやすいと考えた。また、*snow*、*sheet*、*marble* はそれぞれ質感や用途が異なる物なので、3 つのシミリーの違いが顕著に出ることで N2 で表される物の捉え方の差異が分かりやすいという予想があることも選択理由である。

表2 近現代コーパスにおける *white as snow/ a sheet/ marble* の頻度

	BNC 頻度/per mil	HUM19UK 頻度/per mil
<i>white as snow</i>	20 / 0.20	23 / 1.76
<i>white as a sheet</i>	24 / 0.24	11 / 0.84
<i>white as marble</i>	2 / 0.02	3 / 0.22

4 節ではそれぞれの直喻について、使用できる N1 の範囲や用例を観察していく。

4.3 つの直喻の比較

4.1 N2 の語彙・強意直喻表現の出現

それぞれの直喻を比較する前に、*snow/sheet/marble* の 3 語の出現時期と、強意直喻表現として使用され始めたのはいつかを確認しておく。それぞれの出現時期を図 1 に明示した。*snow* は 9 世紀、*sheet* は 8 世紀から *Oxford English Dictionary* (以下、*OED*) に初例があり、どちらもゲルマン語系である。*marble* は 12 世紀からで、フランス語からの借入語である。

OED によると、*as...as* の形で用いられたのは、*snow* は OE からで、*OED* にその記載がある。*sheet* は、確認できる範囲では 1659 年が最も古く、EEBO の例である⁵。*marble* は、*sheet* よりも早い 1597 年で、こちらも EEBO 記載である。

3 つの直喻のうち、*white as snow* が最も歴史がある。*sheet* という単語は OE からあるものの、後発の *marble* の方が強意直喻としての使用が約 70 年早く、*white as a sheet* は 3 つの中では比較的新しい表現である。

図 1 *snow/sheet/marble* の語彙・強意直喻出現時期

Mod E		◦ <i>white as a sheet</i> 1659
	1500	◦ <i>white as marble</i> 1597
ME		- <i>marble</i> 1180
	1100	
OE		- <i>snow</i> 825
	700	◦ <i>white as snow</i> OE
		- <i>sheet</i> 725

※初出年は *OED* と EEBO による

⁵ *white as a sheet* の *OED* での初例は 1752 年であり、名詞 *sheet* 3. c. に記載がある。*white as marble* は 1835 年で、名詞 *pillar* 6.a. に例が見られる。

4.2 N1 と文脈

white as snow / a sheet / marble について、各々N1 と文脈を比較しながら共通点・相違点・意味変化を観察する。

表3は、現代から19世紀まで、表4は18世紀以前のデータから採集した3つの直喻のN1の使用状況を表したものである。灰色に塗り潰した箇所は、その直喻において喻えられたものがあったことを、白い箇所はなかったことを示している。表4の方が表3よりN1項目数が少ないが、これは18世紀以前のデータが現代から19世紀までのものに比べ少数だからである。

表3 現代～19世紀までのN1の使用

		N2				N2		
		snow	sheet	marble		snow	sheet	marble
		shoulders			skin			
N1	身体部位	breast			hands			
		fingers			face			
		face			teeth			
		cheeks			tongue			
		forehead			neck			
		lips			hair			
		tongue			beard			
		neck						
		hair						
		beard						
		brow						
N1	人工物	衣服			衣服			
		布製品			布製品			
		内装			火薬の材料			
		家具			石(建築材)			
		建築物			船			
		石(建築材)			料理			
		料理						
N1	自然物	動物			動物/虫			
		海の波			海の波			
		砂漠			石/岩			
		月			地面			
		花			花			
		氷			卵の殻			
N1	無形/抽象概念				幽霊			
					人種			
					性格/感情			
					想像上の生物			

表3、4に設定したN1のカテゴリーは「身体部位」、「人工物」、「自然物」、「無形/抽象概念」の4つである⁶。「無形/抽象概念」は18世紀以前の例のみに見られた。この全ての分類に *white as snow / marble* が、3つの分類に *white as a sheet* が使用されているが、カテゴリー内の事物一つ一つには差が出ている。*white as snow* は3つの直喻のうち最も幅広いと言える。特に身体部位名詞において、同一のN1 だとしても表す意味が異なる例が見られるため文脈もまた適用できる範囲が大きい。(2)はN1が髪であり、(2a)が悪い状況に対して用いられている一方、(2b)は “venerable”の言

⁶ 身体部位名詞以外を英語表記にしていないのは、その他のカテゴリーにおいて実際に使用されている単語にそれぞれらつきがあるためである。例えば「衣服」の場合 “shirt”や “dress”などが実際の例で見られるが、表の見やすさを優先し、「衣服」と表記した。

葉から分かるように賞賛である。(3)の N1 は髪であり、(3a) は老人の弱々しさを描写する一方、(3b)の髪の持ち主は “the place of honour”に座っている。

(2)a. If these men stay here much longer my hair will be **white as snow** . (HUM19UK)

b. The owner was tall, and of a venerable presence, ...and his hair as **white as snow** . (HUM19UK)

(3)a. An old--old man sat in his cottage on the verge of the Black Forest. He had numbered ninety years ; his head was completely bald--his mouth was toothless--his long beard was **white as snow**, and his limbs were feeble and trembling . He was alone in the world... (HUM19UK)

b. They were assembled in the men's tent, to the number of ten persons ; the place of honour, the corner, being given to my father's uncle, the elder of the tribe, an old man, whose beard, as **white as snow**, descended to his girdle .

(HUM19UK)

時代を遡っても **white as snow** は肯定的にも否定的にも使用できる例が見られる。(4)の N1 は同一のものではないが、(4a) は 鎧を着た輝く (“shone”)乙女の姿であり、(4b)は “repent”や “cursed”などの語が見られる。

(4)a .and on the hill beheld the warlike maid, as **white as snowe** vpon the alpine clift the virgin shone, in siluer armes arrai...

(EEBO)

b. when gerard heard duke naymes, he changed colour, and waxed as **white as snow**, repenting in himselfe the dede that he had done to his brother, hee cursed to himselfe gybouars, in that hee beleeuued his counsel...

(EEBO)

その他「人工物」、「自然物」、「無形/抽象概念」の例は以下のとおりである。N1 はそれぞれ “a truly magnificent swan”、“a dish of rice”、“contrition”。

(5)a. The robin nodded its head and flew off Two minutes later, a truly magnificent swan, as **white as snow**, came swooping in and landed on a branch nearby.

(BNC)

b. Nothing could be more delicious than the meal which she had prepared : there was a dish of rice, **white as snow**, and near it a plate of roast meat , cut into small bits... (HUM19UK)

c. ...why say thy sinnes were blacker then is ieat, yet may contrition make them as **white as snowe**... (EEBO)

white as a sheet は 3 つのカテゴリーに使用されてはいるものの、具体的に使える名詞はかなり限られている。分析したデータは、*white as snow* が 60 例、*white as marble* が 58 例あるが、*white as a sheet* は 81 例採集した結果この狭さが表れている。*white as a sheet* は現代では専ら顔面蒼白を意味し、(6)のように、*OED* の形容詞 *white* の項目にもその意味の記載がある。顔面蒼白の例は(7)に示した。(7a)は病院の場面であり、(7b)の N1 “he”は恐怖を抱いている。

(6)4. a. Abnormally pale or pallid, esp. from illness, or from fear or other emotion. Frequently in (typically hyperbolic) similes (cf. *as white as a sheet* at SHEET n.¹ 3c), in extended use designating an emotion causing pallor (*as white rage*, *white terror*), or in allusive phrases expressing cowardice (cf. *WHITE-LIVER n.*, *WHITE-LIVERED adj.*). (OED)

(7)a. George Cowley arrived at the hospital just as Doyle's now unconscious body was being wheeled into the emergency operating room... As Cowley walked towards the slightly hunched figure of Bodie, he was able to see Doyle's peaceful face, eyes closed, **white as a sheet**... (BNC)

b. When they took him out of the black hole after six hours ' confinement he was observed to be **white as a sheet**, and to tremble violently all over, and in this state at the word of command he crept back all the way to his cell,...

(HUM19UK)

表3と表4に“tongue”、表3に砂漠のN1が見られる。これらは後述するが、顔面蒼白の用法と関連している可能性がある。

18世紀以前には海や花に使用する例があり、近現代と比べて大きな差があると言える。

(8)a. ...when the sloe-tree's as **white as a sheet**, sow your barley whether it be dry or wet... (EEBO)

b. I am just come up from the beach, and I think I never saw a greater sea! why it breaks over the head as **white as a sheet** !!

(1767/Google Books)

*white as marble*は*snow*と同様にカテゴリー全てに使用されている。しかし分析した用例のうち身体部位に使用されているものが7割を占め、体以外の用例はまばらである。個々のN1を見ると、*snow*よりも身体部位名詞が幅広く使える特徴が見られる。こちらも(9)に示すように、肯定否定両方に使用できる。(9a,b)は女性の額と胸の美しさを表す一方、(9c)は死体の青白さを描写する。

(9)a. Her hair was golden and wavy ; her eyes deep blue , guarded by long lashes and arched by what seemed to be a touch of an artist's pencil ; her forehead high and **white as marble** , her ears dainty in their smallness... (1901/Google Books)

b. She watched him gazing amorously at those twin orbs(=breast)⁷, **as white as marble**, and as plump as pigeons. (BNC)

c.an old man kneeling beside the body of a female,... Her tresses were dishevelled, and dripping with wet, as were her garments ; and her features **white as marble** .

(HUM19UK)

また、18世紀以前の*white as marble*の用例は19あり、そのうち岩や建築材が喻えられているものが8例ある。近現代では人間の肌に使用する例が中心的であるため、使用文脈が多少変化したと言える。

(10)a. That Castle has been burnt to ashes by lightning; but the few remains of it that are left, shew it was stately Edifice; the stones it was built with, were as white as marble... (ECCO)

b. In patzolo a place of about 1000 people all swallowed up (by an earthquake), Furla another Town of about the same number of Souls, had the like fate, and the Rocks adjacent which formerly were white as Marble , are now black and as if burnt with Fire... (1694/Google Books)

ここまで*white as snow/a sheet/marble*の3つの強意直喻表現のN1と文脈をかいつまんで観察した。3つの強意直喻が、どのN1に使えるかは差があり、*white as snow* > *white as marble* > *white as a sheet*の順に範囲が広いと言える。次節で考察するのは、①*white as snow*の文脈とN1の広さの理由、②*white as a sheet*の文脈の狭さと狭まった原因、③*white as marble*がなぜ身体部位に使われるようにな定着したか、なぜ同じ身体部位でも異なる意味で使用できるか、の3つの問題である。

⁷ 用例にかっこ内で示す内容は筆者の注である。

5 考察

前節で観察したデータより疑問点を指摘し、*white as snow*、*white as a sheet*、*white as marble* の順に、使用特徴の原因を探る。

5.1 *white as snow*

OEの時代からあるこの強意直喻は、使用文脈が幅広い。BNCでは*white as a sheet*に次いで頻度が高く、HUM19UKのコーパスでは最も多いので、使用される回数が多いという特徴もある。この表現は他の言語でも一般的に見られる(Svaertengren1918:234)ので、雪は白さの典型であったと言えよう。おそらくOEの時点では、*white as snow*は white as + Nの強意直喻表現のフォーミュラであったのではないか。つまり *white as snow*を元にした上で、名詞を様々に入れ換えて *white*を含む強意直喻表現のパターンが作られていった可能性がある。元々 *white as snow* という一つの直喻が中心に用いられ、様々な文脈に使用でき、その後 *snow* 以外の名詞を入れてバリエーションが増えたものの、*white as snow*の使用範囲は他の *white*を含む強意直喻表現に強く影響を受けなかつた。そしてその文脈の幅広さは、現代まで保持されていると思われる。

BNCとHUM19UKの用例数を見ると *white as snow* と *white as a sheet* が2強で、後はまばらである。EEBOで *white as snow* に次いで多いのは *white as milk* である。近現代の *white*を含む強意直喻表現は *white as snow/a sheet* の二つに収斂したと言えるだろう。

現代から19世紀までの *white as snow* と *white as marble* を比較すると、N1が身体部位の場合は、前者は “face”、“neck”、“beard”など顔周りの名詞に集中している一方、後者の方が N1が幅広い上に、“shoulders”、“breast”、“fingers”など顔から離れた部位にも使用されている。二つの直喻が影響し合い担当する範囲ができた可能性がある。また、同じく現代から19世紀までの *white as a sheet* は専ら顔の青白さについて使用するので、身体部位の喻えとしてこの直喻も影響があったのではないか。

5.2 *white as a sheet*

3つの強意直喻表現のうち、おそらく最も大きな変化をしているのが *white as a sheet* だと言える。現代から19世紀までの使用文脈は顔面蒼白のみであるが、この意味が中心となる前は、花や海の波に用いられた例が見受けられる。

(8)a. ...when the sloe-tree's as **white as a sheet**, sow your barley whether it be dry or wet...

(EEBO)

b. I am just come up from the beach, and I think I never saw a greater sea! why it breaks over the head as **white as a sheet** !!

(1767/Google Books)

この(8)は布の広がる様に注目されている。水平方向に広がりをもつ白いものに対し *sheet* と喻えることがあり、OEDによると初出は1593年である。日本語の「一面の〇〇」という表現に近いと思われる。(8a)は花が満開の様子であり、(8b)は波が眼前に広がっている様を *sheet* と言っているのである。OEDの *sheet* の項目に記載されている意味は(11)を参照。

(11)8. A broad expanse or stretch of something lying out flat, presenting a white or glistening surface, or forming a relatively thin covering or layer.

(OED)

white as a sheet 顔面蒼白の使用例が最初に現れるのは1723年で、18世紀から顔色の悪い様に用いられるのが固定されていったと考えられる。sheetのシンボルは「死、亡霊」(Vries 1974:573)なので、慣用化していく18世紀の間に、その面が際立ったと考えられる。(12)のN1が“tongue”と砂漠の例は、体調不良や大地の不毛さが *sheet* の象徴「死」と結びつくものだと捉えるなら、顔面蒼白の意味が固定していく過程の中で現れた例としては不自然な存在ではないだろう。

(12)a. He was restless, an oppression and difficulty of breathing, prostration of strength, his ... tongue as white as a sheet...

(1778/Google Books)

b ...the country being entirely a desert... the country is very even and white as a sheet , nothing vegetable grows upon them ;
(1819/Google Books)

また、*Oxford IDIOMS Dictionary for learners of English* では、この直喻は “(as) white as a sheet/ghost” と表記され、sheet に「死」「亡霊」の象徴があるということを示唆している。BNC と HUM19UK では、N2 のスロットに死に関連する言葉が ghost の他にも現れる。BNC では bone と ash、HUM19UK では death、ashes、tombstone、gravestone、corpse が見られる。これらの N2 には、Moon(2008)の言う “conceptual simile” が関わっていると考えられる。Moon (2008)は、as-similes の型と N2 がもつていて性質を利用して新たに強意直喻表現を作ることができると指摘している。thick as fleas/locusts/midges などの表現に thick as NEGATIVELY-EVALUATED INSECTS という “conceptual simile” が存在することによって、例えば thick as flies のような新しい直喻を生み出せるという (*ibid.* 33)。

white as a sheet の場合、white as DEATH という概念シミリーを想定することができる。この概念シミリーによって sheet の象徴的意味「死」「亡霊」が際立ち、「顔面蒼白」の使用の固定化が促されたと考えられる。

5.3 white as marble

white as marble は身体の美しさ、または青白さを表すのが 18~19 世紀に定着したと考えられる用法である。慣用化する以前は岩や建築材がこの直喻で喻えられる例が見られる。人間の肌よりも岩や建築材などのほうが実際の色や質感が大理石に近く、喻えとして理解しやすいはずだが、何故身体に用いられるようになったのだろうか。また、身体に使う場合でも、美しさや青白さなど異なる意味で使用できるのは何故か。

まず、顔が青白いという状況は、(9c) のように体の冷たさと隣接している場合が多いと言えよう。死体の肌は血色が悪い上に体温がなく冷たい。死体であればさらに死後硬直をも見る者に思わせるので、marble のもつ固さ⁸という側面も直喻に表れているだろう。marble の固さを表す例文は(13)に示した。

(9c). ...an old man kneeling beside the body of a female...Her tresses were dishevelled , and dripping with wet , as were her garments ; and her features white as marble .
(HUM19UK)

(13)1642 Sir T. Browne *Religio Medici* (new ed.) 134 I have no conscience of Marble to resist the hammer of more heavy offences.
(OED)

また、marble は白いという特徴以外に冷たいという側面があり、marble-minded, heart of marble などの表現に表れている。これらは人の心を大理石に喻えるフレーズであり、このような表現の存在が white as marble を身体部位に用いるのに作用したのではないか。OED の形容詞 marble の項目 3.b.にこの比喩義の記載があり、「冷たい心」で用いられているのは 1598 年が最初である。

(14)1598 J. Florio *Worlde of Wordes* Inespiable, inexpiable,..vnmercifull, deadlie, marble-minded.
(OED)

次に、美しさを表すことができる根拠として、大理石は「記念建造物と彫像は大理石で造られることが多いので、神、崇拜、権威を表す」ものである (Vries 1974:416)。崇拜の中に美しさが共生し得るなら、そこから人の美しさを表すようになった可能性がある。OED の名詞 marble の用例には、建築材の大理石と “fair” “beautiful” の語が共起しているものがある。

(15)marble, n. I. Senses relating to the stone.

1.a. Limestone that has been recrystallized by metamorphism and is capable of taking a polish; esp. one that is pure white or has a mottled surface, such as is often used in sculpture and architecture. Also more

⁸ 大森文子教授のご教示による。

generally: any stone that will take a polish and can be used for decorative purposes in building or sculpture.

β.

- a1200 *MS Trin. Cambr.* in R. Morris *Old Eng. Homilies* (1873) 2nd Ser. 145 (MED) [Mary Magdalene] nam ane box ȝemaked of marbelstone.
- c1330 (►?c1300) *Bevis of Hampton* (Auch.) 4609 (MED) A faire chapel of marbel fin.
- ?a1400 (►a1338) R. Mannyng *Chron.* (Petyt) ii. 341 (MED) Of marble is þe stone, & purtreid þer he lies.
- ?a1425 *Mandeville's Trav.* (Egerton) (1889) iii. 9 All þe pilers er of marbill.
- 1474 W. Caxton tr. *Game & Playe of Chesse* (1883) iii. iv. 110 Also colde and harde as marbill.
- 1553 R. Eden tr. S. Münster *Treat. Newe India* sig. Fv^v Ouer this ryuer is a very fayre bridge of marble.
- 1617 F. Moryson *Itinerary* i. 162 All the pauement is most beautifull of ingrauen Marble.
- 1705 J. Addison *Remarks Italy* 270 Not to mention what a huge Column of Granite, Serpentine, or Porphyry must have cost... It is well known how these sorts of Marble resist the Impressions of..Instruments.
- 1794 A. Radcliffe *Myst. of Udolpho* II. ii. 40 From the portico they passed a noble hall to a staircase of marble.
- 1857 J. Ruskin *Polit. Econ. Art* i. 46 Marble..lasts quite as long as granite, and is much softer to work.
- 1916 *Bull. U.S. Bureau of Mines* No. 106. 122 Marble is used for foundation stone and retaining walls.
- 1974 M. Ayrton *Midas Consequence* viii. 187 The Greeks punched out marble in the whitest and clearest light on earth and at their best, before the steel chisel was invented, they splintered it out in particles so that the bruised stone ate the light in minute facets.
- 1988 *S. Afr. Panorama* May 24/2 The alternative was built-in art or clever devices..like painting concrete pillars to look like genuine marble.

加えて、慣用化する前に、大理石と色や質感の類似した岩や建築材を喻えるのではなく、身体部位を喻えるのは、新奇さや、意外性を出す意図があると言える。色彩語の直喻の意外性が高いと慣用化しにくいという可能性を須賀川(1999)は指摘している。これは *white as marble* の意外性がどのように失われていったかを考える必要がある。

5.4 考察のまとめ

ここまで *white as snow/a sheet/marble* の使用傾向と、なぜその傾向が生じるようになったかを分析した。古くからある *white as snow* は *white as N* の強意直喻の基本の型であり、そのために他の強意直喻表現の影響を受けづらく、幅広い文脈で使用できることを主張した。*white as a sheet* は、*sheet* という単語は時代によって捉え方が異なるが、強意直喻が慣用化して顔の青白さを表すようになった。*sheet* が「死」「亡霊」の象徴であることと、*white as DEATH* の conceptual simile が現代の用法の定着を促したと考えられる。*white as marble* は身体部位の美しい白さと不健康な白さ両方について表す言葉である。この使用特徴は、*marble-minded*, *heart of marble* などの *marble* の比喩義を表した言葉が影響し、冷たさや固さに着目する場合と、美しさに着目する場合があるので *white as a sheet* より使用文脈が幅広くなったのだと考えられる。

6. 結論と課題

本稿では強意直喻表現 *white as snow/a sheet/marble* の使用傾向の比較を行った。N1 や、N2 が文化的にどう認識された上で直喻に現れるのかが十分に分析されていないことを踏まえ、N1 の使用範囲と文脈を用例から観察した。*white as snow* の文脈の広さは、*white as snow* が *white* を含む強意直喻表現のフォーミュラであることが要因として考えられる。*white as a sheet* の文脈の狭さ—顔面蒼白—は、*sheet* のもつ象徴と、*white as DEATH* の概念シミリーが影響していると言える。しかし、*white as a sheet* が現代において使用頻度が非常に高い理由は今後分析する必要がある。*white as marble* については、身体部位に使用される点に着目した。肯定的に用いられる場合は、建築物や

彫像に利用されるという大理石の用途が関連しており、否定的に用いられるのは、顔色が悪い状況に付随する人間の状態が、大理石の特徴とメタフォリカルにつながるためであると指摘した。

この3つの強意直喻表現は、身体部位を描写する比喩という共通点がある。そのため、互いに影響し合ったことで、使用できる身体部位のN1が現代においてある程度定まった可能性がある。おそらく、*white as snow*が*white*を含む強意直喻のフォーミュラだったため、出現したタイミングでは身体部位に幅広く使用でき、その後*white as marble*の影響を受けて顔とその周辺の語彙に限定されたという予想が立つ。しかし、*white as snow*はOEから存在しているので、その後様々な強意直喻表現によって意味や使用領域が変えられた過程もあるはずだ。また、*white*という形容詞の使用状況の変遷も、この問題を扱うには考慮に入れなければいけない。

最後に、本稿で使用したデータベースはジャンルを統一していないという問題がある。より良い分析をするために、改善点とし、今後につなげたい。

参考文献

- Berlin, B. & P. Kay. (1969). *Basic Color Terms, their universality and evolution*. Berkley: University of California Press.
- Lakoff, G. & M. Johnson. (1980). *Metaphors We Live By*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Lakoff, G. (1987). *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Lakoff, G. & M. Turner. (1989). *More than Cool Reason: A Field Guide to Poetic Metaphor*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Lindquist, H. (2009). *Corpus linguistics and the description of English*. Edinburgh: Edinburgh University Press. (渡辺秀樹・大森文子・加野まきみ・小塙良孝訳(2016). 『英語コーパスを活用した言語研究』. 東京: 大修館書店。)
- Moon, R. (2008). "Conventionalized as-similes in English: A problem case". *International Journal of Corpus Linguistics*. 13(1), 3-37.
- Norrick, N. (1986). "Stock similes". *Journal of Literary Semantics*, XV(1), 39-52.
- Nunberg, G., I. A. Sag, & T. Wasow. (1994). "Idioms". *Language*, 70(3), 491-538.
- Richards, I. A. (1936). *The Philosophy of Rhetoric*. Oxford: Oxford University Press.
- Svartengren, T. H. (1918). *Intensifying Similes in English*. Lund: Gleerupska.
- Trim, R. (2011). *Metaphor and the historical evolution of conceptual mapping*. London: Palgrave Macmillan.
- Vries, de, A. (1974). *Dictionary of Symbols and Imagery*. Amsterdam and London: North-Holland Publishing Company. (山下主一郎ほか訳(1984). 『イメージ・シンボル事典』. 東京: 大修館書店)
- Wyler, S. (1992). *Colour and Language: Colour Terms in English*. Tübingen: Gunter Narr Verlag Tübingen.
- 坂本真樹. (2007). 「色彩語メタファーへの認知言語学的関心に基づくアプローチの検討」. 『メタファー研究の最前線』. 東京: ひつじ書房.
- 須賀川誠三. (1999). 『英語色彩語の意味と比喩—歴史的研究』. 東京: 成美堂.
- 瀬戸賢一. (1997). 『認識のレトリック』. 東京: 海鳴社.
- 新妻明子. (2013) 「心的状態を表す英語の色彩語メタファー: 認知意味論に基づく意味拡張のプロセス」『常葉大学短期大学部紀要』第44号, 47-62.
- 福田邦夫. (1994). 『ヨーロッパの伝統色—色の小辞典』. 東京: 読売新聞社.
- . (1999). 『色の名前はどこからきたか—その意味と文化』 東京: 青娥書房.
- . (2017). 『色の名前事典 507』. 東京: 主婦の友社.
- 吉村耕治. (1997). 「中期英語の色彩表現の曖昧性」. 『英語青年』. 142(10), 550-554.
- 渡辺秀樹. (2005). 「強意的頭韻直喻 "as dead as a/the dodo" の発達と異種」. 『言語文化研究』, 第31号, 163-186.

辞書・コーパス

- 『ジーニアス英和大辞典』 KONISHI Tomoshichi, MINAMIDE Kosei and Taishukan, 2001 -2011
『ランダムハウス英和大辞典 第2版』 Shogakukan Inc., 1973, 1994, and Random House, 1987.

Oxford IDIOMS Dictionary for learners of English. Oxford University Press 2001 and 2006.
Oxford English Dictionary. Oxford University Press, 2020. (<https://www.oed.com>)

British National Corpus. (<https://www.english-corpora.org/bnc/>)
Early English Books Online. (<https://www.english-corpora.org/cebo/>)
Google Books. (<https://www.english-corpora.org/googlebooks/>)
HUM19UK, Version 1. (2019). University of Huddersfield, Utrecht University, University College Roosevelt, Middelburg. (<https://www.linguisticsathuddersfield.com/hum19uk-corpus>)
NII-REO 人文科学系コレクション ECCO 検索
(https://reo-nii-ac-jp.remote.library.osaka-u.ac.jp:8443/hss/ecco_searchdetail)
Gale, A Cengage Company.(2021).18世紀英語・英国出版物集成
(<https://www.gale.com/jp/c/eighteenth-century-collections-online>)
サイト最終閲覧日 2021年12月31日